京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

News Letter

Graduate School of Education

巻頭言 楠見　孝　副研究科長 ❷

研究ノート ❸
教員から　VAN STEENPAAL, Niels　教育学講座 准教授
院生から　望月 陽子　心理臨床学講座 修士課程2年
社会人院生から　髙田 満彦　教育社会学講座 修士課程2年
留学生から　余　姿慧　教育学講座 修正課程2年

活動報告 ❺
臨床教育実践研究センターから
時岡 良太　附属臨床教育実践研究センター 特定助教
教育実践コラボレーション・センターから
大山 泰宏　心理臨床学講座 准教授

E.FORUMから ❻
西岡 加名恵　教育方法学講座 准教授

《探究型》「教育研究入門I」の船出
服部 憲児　比較教育政策学講座 准教授

平成28年度教育学研究科長賞 ❼
上田 勝久　臨床実践指導学講座 博士後期課程2年
椎名 健人　教育社会学講座 修士課程2年

国際交流 ❽
南部 広孝　比較教育政策学講座 准教授
齊藤　智　教育認知心理学講座 教授

事務室から 荒木　茂　教職教務掛長 ❿

図書室から 飯田 智子　図書掛長 ❿

オープンキャンパス2016 ⓫

大学院・学部学士入学 入試説明会 ⓫

諸記録 ⓬
①おもな出来事　②人事異動　③外部資金受入　④教育学研究科・教育学部基金

諸報 ⓮
新任教員・事務職員紹介

京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

No.33
2016.12

巻頭言

批判的判断力をはぐくむ

副研究科長 楠見　孝

京都大学教育学部・教育学研究科の教育目標の一つに「広い視野と異質なものへの理解、多面的・総合的な思考力と批判的判断力」の形成がある。これは、批判的思考力(クリティカルシンキング)の育成といいかえることができよう。批判的思考力とは、証拠に基づいて多面的、論理的に思考し、偏りがないかを内省して、適切な判断をおこなうことである。近年では、21世紀型スキルの１つとして、コミュニケーション、コラボレーション、クリエイティビィティとともに4Cとして育成が重視されている。

批判的思考を長年の研究テーマとしてきた私にとって、第一の問題は、「批判的思考」が相手を「批判（非難）する思考」として、誤解を生みやすいことであった。その点、「批判的判断」という言葉は、「批判」の対象が他者ではなく、自らの判断が適切かどうかを内省することを示すため、攻撃的な印象を持たれないという利点がある。

第二の問題は学校教育への導入である。5年前くらいまでは高校の先生に対して、批判的思考力育成の大切さを伝えても、「大切なことはわかるが、大学入試が変わらない限り、高校教育に取り入れるのは難しい」という反応が多かった。しかし、近年、思考力を重視する教育と大学入試改革が進み、状況が変わってきた。たとえば、平成28年度に導入された京大教育学部の特色入試でも批判的思考力を重視する入試が行われるようになった。また、大学卒業時に身につけおくべき能力として学士力や社会人基礎力においても思考力が重視されてきている。

第三の問題は、批判的思考力をいかに育成するかである。一般に、批判的思考力のある人は、批判的思考のスキルをたくさんもっている。そこで、批判的思考のスキルを教えることによって、学習者は批判的思考ができるようになるという考え方がある。こうした考え方に基づく批判的思考教育は、ジェネリック（汎用）スキルの教育として、大学初年次にライティングなどのアカデミックスキルとともに育成することが多い。ただし、思考スキルだけを訓練するよりは、日常的または学問的な問題解決過程全体の中で教える方が効果が高いことが明らかになっている。したがって、プロジェクトベースの学習の中で、資料収集と読解、推論、討論や発表を通して、コミュニケーションやコラボレーション、クリエイティビティとともに育成することが大切である。今年度から授業方法を一新した「教育研究入門Ｉ」はこうしたタイプの授業である。

これまで大学では、思考スキルを明示的に教える授業は一般的ではなかった。学生は、講義、ゼミ、卒論などを通して、学問の世界に没入し、批判的思考力を高めてきた。しかし、こうした方法ではすべての学生が批判的思考を高めることができていなかった。そこで、もう一つの方法が、専門科目の授業や研究指導の中で、批判的思考のスキルを明示的に教えることである。たとえば、論点や暗黙の前提を明確化する、情報源の信頼性を評価するなどのスキルである。こうしたスキルを身につけることによって、専門の研究が的確にできるようになる。

それでは、教育学部、教育学研究科の修了時に「多面的・総合的な思考力と批判的判断力」が形成されたかをどのように評価すれば良いのか。これが第四の問題である。卒論、修論は、論文審査と口頭試問によって、学修の集大成としての成果に反映されている思考力を評価することができる。一方で、批判的思考力を測るテスト開発も内外で進められている。教育学部特色入試の課題のように、多数の資料を呈示して思考力を測るテストは一つの方法である。こうしたテストを米国の一部の大学では修了時におこない、そのスコアを、学生はGPAに代わる能力の証明として企業に示し、大学は4年間の教育成果を示すために使っている。ただし、テストには測定可能な能力に限界があるなど、導入するには課題が多い。しかし、大学において、実社会においても活用できる能力（ジェネリックスキル）としての思考力の育成と評価が重視されるようになってきたことは確かである。

京都大学教育学部・教育学研究科にとって、教育目標の一つである学生の批判的判断力を育むための方法と評価を考えることは今後の課題である。そして、大切なことは、学生が社会に出てから、京大で培った批判的判断力を発揮して、よりよい人生と社会を築くことであると考えている。

教員から

学生諸君へ（北海先輩より）

教育学講座
准教授
VAN STEENPAAL, Niels

「京都に学びに来ている学生の80%は、大して勉強できていないまま実家に帰る」。

先ず、ご安心ください。以上は文部科学省が出したデータでもなく、また近年のデータでさえありません。十八世紀京都に在住していた江村北海という儒者が自著『授業編』（1773年刊）中で勝手に言っているだけです。とはいえ、北海も単なる傍観者ではなく、私塾を経営していた、いわば教育現場の先輩でもあるので、一応その経験談に耳を傾けてみましょう。

北海曰く、「諸国ヨリ、京学々々トテ、京都ヘ来リ学ブ生徒、来ルアリ帰ルアリ」のだが、その中「何ヲ一ツトリ得タル事モナク、郷里ニ帰ルモノ、十ニシテ七八ナリ」とのこと。そのわけの一つには、お察しのとおり、「京都ハ行楽ノ地ナレバ、田舎ヨリ来ル年少ノトモガラ、繁華ニ眩ギ、遊蕩ニ流レ、学業ヲ勤メザル、モトヨリ多シ」という。今も昔も相変わらず、書生さんに遊びはつきものみたいです。

しかし、真面目な生徒も要注意。「田舎ニハナキ名高先生」の授業が受けられるせっかくのチャンスを大事にし、「早朝ニ先医書ノ講席ニ出、還リテ朝飯ヲ喫シ、書ヲトリカヘ、懐ニシテ、儒書ノ講席ニ出、還リテ書ノ認メシテ、又一席ニ出デ、モドレバ医書ノタ講、本草ノ夜会ノ、昼夜講釈ヲ聞ニ」と、一日中あちこち授業を追いかけて、走り回っているだけになってしまう。

では、北海はどうしてほしいのか。遊びと勉強の適宜なバランスを取るように、というオチに導いているかと思えば、そうではありません。そこはやはり儒者らしく、厳格なアドバイスをしています。「タダ読書」と。清代に流行った『肉蒲団』のようなキワドい小説でもいいからとにかく読書しなさい、と。

二百四十年前の北海先輩の見解は、現代においてどこまで通じるかはわかりませんが、勝ち組の20%になりたい方々は是非試してみてください。『肉蒲団』を敷居が高いと感じるのであれば、私からもうちょっと健全たる候補を出しましょう。シュテファン・ツヴァイク『心の焦躁』。これがなかなか、いい話です。

院生から

変わらない学びの場で新しく学ぶこと

心理臨床学講座
修士課程2年
望月 陽子

私は平成10年に当時のCコースを卒業し，一旦は心理の道を諦め，法務教官，高校教諭などの仕事を経験してきました。現在も静岡県の高校に籍を置き，自己啓発等休業を利用しています。教育現場での経験が長くなるにつれ，心理学の知識は須用でありながら自分の僅かなそれでは現場の役に立たないと感じる機会が増え，大学院で学び直す決意をしました。受験にあたっては，ユング心理学を学べる国公立をと考え，そうなると京大以上の場所は無く，母校に出戻りすることになりました。

社会人枠の第二種で入学したのは私1人でしたので，入学当初は居場所がないと感じたこともありました。しかし，学部時代にお世話になった先生方がまだおられたり，同級生が先生になっていたりと，多くの人たちとの嬉しい再会ができ，自分がここに繋がっていたことを実感しました。加えて，明るく素直な同期の若者たちが，心の支えとなりました。

臨床心理士を取得するためのカリキュラムは決して楽なものではありません。しかし，学びの環境においてここまで恵まれている大学院は，そう多くはないのではないでしょうか。第一線の先生方から直接に指導を受けられ，実践を通して専門知識を見に付けられることは何という贅沢なのだろう，と日々感じています。それは，自分が一度アカデミックな場を離れたからこそ感じられる喜びなのかもしれません。

現在は，少しでも教育現場で役に立つ知識を身に付けて帰りたいと考え，日本人らしさや，思春期の自我の課題について研究しています。日本人がその文化の中でどのような自我の在り方を形成したか，特に若者の自我の主体とはどのようなものなのか，それをユング心理学の視点からはどう捉えられるのか。こうした学びへの興味は，とても2年間の修士課程の中に収まりきるものではありません。復職後も現場に生きる研究を続けられるよう，そのための基礎をこの大学院生活で固めたいと思っています。

社会人院生から

「30数年ぶりの大学復帰 ―驚きと感動の毎日― 」

教育社会学講座
修士課程2年（専修コース）
髙田 満彦

平成27年3月末に学校現場を定年退職し、京都大学でお世話になることになりました。復帰当初は何もかもが真新しく初めてのことばかりで、「浦島太郎」どころか外宇宙からやってきた「ＥＴ」の気持ちでした。まず、ＩＴ環境の進化が著しく、事務連絡、レポートの提出から始まり成績の連絡、図書の検索や研究関連情報の入手などスマートフォンやコンピュータさえ持っていれば世界中どこにいても瞬時に大学と連絡が取れ、研究も進められます。これは驚きというより感動でした。

大学に戻ってもう一つ感動したことは先生方が大変親切で学生の指導に熱心なことです。私が学部生だったころはよほどしつこく指導の先生に付きまとわなければ指導を受けられませんでした。言うならばかつて大学の先生は研究者としての側面が強く、教育者としての側面はその次といった状態でした。しかし、現在の大学での指導の丁寧さ、充実ぶりを見ていると本当に今の大学生・院生は恵まれていると思います。

大学院での研究はコミュニティを大規模自然災害が襲った時果たして耐えうる力を持っているのか、またそのリスクに対してどのようにガバナンスを設計していくのかということを色々な角度から検討しています。現役の時、職務上「危機管理」は最も重い責任の一つであり、私は様々なハザードの発生時に児童生徒の命を確実に守るというミッションをコミュニティが持つ力を活用しながら達成することを考えていました。現在、私は岩井八郎先生の教育社会学講座に所属しながらグローバル生存学大学院連携プログラム(GSS)で研究を行っています。GSSは大規模自然災害、感染症、食糧問題、気候変動、環境問題等国境を越えて発生する様々な問題に京大の9つの研究科と3つの研究所が力を合せて解決のための研究に取り組むプロジェクトであり、各研究科から集まった若手の精鋭たちと学際的な研究に取り組んでいます。これまでに国内各地、米国カリフォルニア州をフィールドとして調査を行い多くの知見を得ました。さてここまで書いて皆さんは思われるでしょうね。「年とってからそんなに勉強してどうするの？」って。

ご心配なく。大学院修了後、あと10年は現場で実践者として頑張り、京大で学んだことを生かして社会に貢献していきたいと思っています。ご褒美の世界一周旅行はその後ですね。

留学生から

日台間の情報量の差を埋めよう

教育学講座
修士課程２年
余姿慧

気が付いたら、2016年の終わりがいつしか目の前に迫ってきました。私が京都で過ごしてきた三年目の冬。修論に追い詰められている最中、学生生活の次の段階へのこの過渡期、最初に日本に来た時の初心を、ふと思い出しました。

大学二年生の時、東日本大震災が日本を襲いました。台湾では、「日本に義援金を送ろう」というブームが起きました。テレビ番組も義援金を呼びかけていて、日台の友好的な交流がまさにもっとも盛んだった時期だと言っても過言ではありません。最終的に、台湾は世界中どの国よりも巨額の義援金を日本に送ったことになりました。私はこれまでにも台湾は「親日的」だという言説について慣れ親しんできましたが、これほどの運動に至ったことに対して驚きました。何故台湾社会は日本に対する友好的な姿勢をここまで示そうとしているのか。そういう疑問を抱えて、日本に留学し、日台関係を研究しようと決心しました。

実際に日本に来てみて感じたのは、台湾人が日本に関心を持っているほどには、日本の人は台湾に関心を持っていないように思えることでした。2014年の台湾の「ヒマワリ学生運動」や、2016年の台湾総統選、及び立法院（国会）選挙における民進党の大勝についても、あまり知られていないようです。でも、日本の国民的卓球選手福原愛さんの結婚、日本の最大野党である民進党の蓮舫代表の国籍問題など、近年の日本の動向を見ると、これから日本と台湾の関係はもっと緊密になるだろうと確信しています。台湾人はかつて日本の植民地統治を経験したこともあって、日本を知らない人はいません。しかし、日本では、台湾を知る人は少ないようです。そういう「歴史経験の差」と「情報量の非対称性」は、日本に来てから何回も痛感しました。これから日台関係史を研究しつつ、台湾のことを海外に発信する研究者となることを目指したいと思います。

附属臨床教育実践研究センターから

センターの活動と実践の報告

附属臨床教育実践研究センター 特定助教　時岡 良太

今年で開設20年目となる臨床教育実践研究センターは、開設以来一貫して、市民に開かれた心理教育相談室での心理臨床実践を中心に活動してまいりました。また、そうした臨床実践に根差した知を社会に還元する活動として、毎年「リカレント教育講座」と「公開講座」を開催しております。

8月には、第20回リカレント教育講座が開催されました。今年度は「発達障害の理解と対応」をテーマとしたシンポジウムと、教育現場における事例の検討会が行われました。シンポジウムでは、発達障害の理解と対応に造詣の深い臨床心理士、医師、元養護教諭の先生方をシンポジストに迎え、多角的な視点からお話しいただきました。当日は約70名の方々にご参加いただき、活発な議論がなされました。

10月には、公開講座「母子関係と創造性―ウィニコット理論から『受胎告知』を理解する―」が開催され、多数のご参加を賜りました。講師は当センター客員教授で英国精神分析協会のJan Abram先生で、「受胎告知」の場面を描いた芸術作品に共通して描かれているテーマについて解説され、精神分析家のウィニコットの母子関係の理論を通じて、心理臨床実践で起っていることについての考察をお話しいただきました。

また、東日本大震災以降、当センターでは「こころの支援室」を開設し、震災に関連して関西圏に避難・移住されてきた子育て世帯への支援活動を継続して行ってきております。今年度はこれまで、7月に京都大学総合博物館との共催企画「京大博物館ツアー　虫博士になろう！＆和話輪の会」を実施し、多くのご参加を頂きました。震災から時間が経つにつれ、それぞれが抱えておられる困難の形も個別化してきている状況にあることを踏まえつつ、今後も活動を継続して行っていく所存です。

こうした当センターの活動を支えていただいている方々に感謝するとともに、今後ともご協力とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

教育実践コラボレーション・センターから

コラボに想う

心理臨床学講座 准教授　大山 泰宏

振り返ると，私が教育実践コラボレーション・センター（以下，コラボ）に参加し始めてから10年になろうとしている。私にとって，コラボは，まさに教育学研究科そのものであり学ぶことも多かった。教育学あるいは教育科学は，ひとつの学問的ディシプリンというよりも，教育という共通のテーマ・課題に対して，多様な学問的立場から解明し改善していく営みである。コラボは，まさにその集約である。私が学外の教育現場に関わり，そこでの課題に関する相談を受けたとき，いつも真っ先に頭に浮かぶのは，コラボである。コラボなら，その課題に取りくめる，と。

ひとつの教育の課題には，ミクロ的な視点からマクロ的な視点まで，制度的側面から個々の教育場面での相互行為まで，そしてそれらの背後にある思想的背景まで，多くの位相が関係している。教育学の実践研究をおこなううえでは，そうした多分野への視慮は不可欠である。だが，現状の私たち大学人をとりまく時勢の中では，自分たちが生き残るのに必死である。未来に向けた希望よりも，兵糧攻めに合う中でいかに生き延びていくか思案するのに心を砕き，日々の苦労話を共有しあうことが，いつのまにか話題の中心となってしまった。そうした中でコラボは，教育学の他分野と繋がり，お互いに学び合える貴重な場である。定期的に開催される「知的コラボの会」，進行中の様々なプロジェクト等，もちろん運営上の苦労も伴うが，純粋に学究的な楽しみが体験できる。

コラボの会合は，明るい前向きな雰囲気に満ちている。センター長の桑原教授のテンポ良い議事進行のもと，本音を語りあう「アフター教授会」である。しかしながらコラボは，残念ながら現在はバーチャルな組織であり，安定した制度的・資金的裏付けを欠いている。教育学研究科の公式史料には，その軌跡は記されないと聞いたこともある。現場の教育課題の多さと難しさを実感し，コラボこそがそれに取り組めると思いつつも，おいそれと，活動に持ち込めない資源不足の辛い現状がある。

史料に記されない日常こそが，実は歴史を支えているというのは常ではあるが，自分たちにとって，手応えとやりがいのある活動を，誇りをもって安心しておこなえるよういつか風向きが変わることを望みつつ，コラボでは今日も日々の営みが丁寧におこなわれている。

E.FORUMから

平成28年度「全国スクールリーダー育成研修」

教育方法学講座 准教授　西岡 加名恵

E.FORUMでは、2016年8月19・20日に2日間にわたり研修を提供しました。

1日目は、ワークショップ「カリキュラム設計入門―パフォーマンス課題づくり」（西岡加名恵）、ならびに講義「若い教師に伝えたい授業づくりの発想」（石井英真准教授）・講義「街づくりと学校づくり―アーキテクチャ論から考える教育」（山名淳准教授）を提供しました。また、シンポジウム「高等学校のおけるカリキュラム改善―探究的な学習を中心に」では、先進的な取り組みを進めておられる高等学校から渡邉久暢教諭（福井県立若狭高等学校）と西條哲司教諭（和歌山県立和歌山高等学校）にお越しいただき、実践報告をしていただきました。さらに、探究的な学習を支援する立場として、岡本真澄主任指導主事（大阪府教育センター）にもご報告をいただきました。

・講義する山名淳准教授（分科会B2）

・シンポジウム登壇者の先生方
（左より渡邉久暢教諭・西條哲司教諭・岡本真澄主任指導主事）

2日目は、高見茂研究科長に「米国の高大接続プログラム―AP（Advanced Placement）プログラムに注目して」というテーマで講演いただきました。また、シンポジウム＆教科等別分科会「E.FORUMスタンダードの再検討に向けて」を開催しました。E.FORUMでは会員の実践資料を蓄積するデータベース「E.FORUM Online（EFO）」を開設しています。そのデータなどを生かし、2014年には、各教科の「本質的な問い」やパフォーマンス課題を提案する「E.FORUMスタンダード（第1次案）」を公表しました。今回の教科等別分科会では、「E.FORUMスタンダード」改訂に向けた検討を進めました。また、『「スタンダード作り」基礎資料集（第2集）』の作成に向けて、実践報告の投稿も呼び掛けました。

E.FORUMは、これからも実践に役立つ新たな知見と楽しくて元気の出る研修を提供していきます。引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

・講演する高見茂研究科長

・教科等別分科会の様子

《探究型》「教育研究入門Ⅰ」の船出

比較教育政策学講座 准教授　服部 憲児

特色入試の実施に合わせて、これまでリレー講義方式で行われてきた１回生配当の必修専門科目「教育研究入門Ⅰ」を、探究型の授業にリニューアルしました。近年では学習者を中心に据えた教育方法、アクティブラーニングが高校でも導入されるようになってきています。一方、2回生以上については以前より学習者主体の教育が行われてきました。高校と大学をつなぐ入試改革に加えて、1回生向けに探求型の授業を実施することにより、探求型、学習者主体型の教育活動のラインがつながることになります。授業のプランニングにおいては、上記の高大接続に加えて、教員・TAの教育力の向上や授業改善のためのデータの採取も意識しました。

授業は教員３名とTA６名の体制で実施しました。受講生を５名ずつに分け、各班でテーマを設定して探求活動を行いました。４～５班ずつを教員１名とTA２名でサポートしました。紙面の関係ですべては紹介できませんが、研究テーマは「日本のAO入試」「家庭における第二次反抗期の子どもとの関わり方」「女子大学の存在意義」など、たいへん興味深いものばかりでした。テーマを深めるために行った中間検討会では、各班の報告後の質疑応答において次々と手が上がるなど、主体的な授業参加が見られました。

授業評価アンケートの記述などを見るに、この授業に対する受講生の評判は高かったと言えます。とりわけ充実した実施体制、探求型の授業方法に対しての評価する声が多くありました。また、受講生たちは、授業を通して研究の難しさを実感したようであり、その悔しさや不満感が２回生以上の教育・研究の糧になることが期待されます。他方で、テーマや授業設計、学生の学習・生活実態への配慮など、いくつか問題点も明らかになりました。来年度に向けて各種データを参照しながら改善していきたいと思います。

平成28年度教育学研究科長賞

学生表彰選考委員会委員長・研究科長　高見　茂

このたび、平成28年度研究科長賞の選考の結果、臨床実践指導学講座博士後期課程2年の上田勝久さんと教育社会学講座修士課程2年の椎名健人さんが、研究科長賞受賞者に選ばれました。誠におめでとうございます。

この賞は平成24年度に創設され、(1)学業、(2)課外活動、(3)社会活動などの分野で優れた成果を上げ本部局の名誉を高めた学生、(4)その他、本表彰に相応しいと認めた学生に対して賞を授与するものです。本研究科・学部の教職員および学生ならだれでも推薦することができます。5回目を迎えた今年度も推薦をお願いしたところ、締め切りの9月30日までに、研究科長賞に(1)学業分野で1名、(2)課外活動分野で1名の推薦がありました。以下、選考経過と選考理由を簡単にご報告します。

まず、学生表彰選考委員会(委員は高見茂・研究科長、稲垣恭子・副研究科長、楠見孝・副研究科長、駒込武・教務委員長、桑原知子・学生委員長)で、推薦を受けた候補者について慎重に協議・検討しました。その結果、上田勝久さんと椎名健人さんを受賞にふさわしい成果を有すると判断し、研究科長賞候補者として決定しました。

上田勝久さんは、在籍がまだ2年間に満たないが、すでに査読付の専門学術誌査への掲載論文3篇、学会発表もすでに4回にのぼっており、日本最大の学会「心理臨床学会」で奨励賞を受賞(2015年9月)、精神分析学の最大学会「日本精神分析学会」でも奨励賞(山村賞)を受賞(同年10月)しました。両学会で共に奨励賞を受賞したことは、日本の臨床心理学の中で大いに注目され、氏が将来、日本の臨床心理学を牽引するに足る充分な資質を備えていることを示しており、本研究科の名誉を高めることに大きく貢献しました。

椎名健人さんは、学生対象の出版企画コンペティションで有名な早稲田大学公認団体「出版甲子園」において、昨年11月の大会で4位に入賞し、大会後計6つの出版社より出版オファーを受けています。また、学部入学後、京都大学新聞社で記者として活躍し、吉田寮生でもあることから、吉田寮に関する多くの情報を誌面を通して発信してきました。今回入賞の作品は『僕が京大吉田寮の「長老」になった理由』であり、吉田寮のみならず京大の「自由の学風」を広く世間にアピールし、本研究科はもとより本学の名誉を高めることに大きく貢献しました。

両氏が今回の受賞を機にさらなる精進につとめ、教育科学の発展に寄与・貢献されますようお祈りいたします。

研究科長賞

臨床実践指導学講座
博士後期課程2年
上田 勝久

このたびはこのような貴重な賞をいただくことになり、大変光栄な気持ちでおります。

昨年度の日本心理臨床学会および日本精神分析学会での奨励賞に引き続き、今回の研究科長賞の受賞は私にとって本当に励みになる出来事です。これも研究科および講座の先生方、職員の皆様、学生の皆様、そして、京都大学という研究環境のおかげだと感じています。

ただ、こうした受賞は私にとって大きな戸惑いを感じさせることでもありました。私などがもらってよかったのだろうかと思ったり、やはり自身のナルシシズムが刺激されてしまったりもするからです。そのため、「賞とは何か」ということに私は真剣に向き合わざるをえなくなりました。

そこで気づいたことは、こうした賞にはたくさんの「想い」がこめられているということです。それは「私」個人を越えた様々な人達の「想いの総体」であり、それを受けとった限りは、今度はその「想い」を私が臨床現場や社会に還元していく必要があるのだろうと考えました。私はとても重要な課題と今後の仕事を授かったのだと思います。

このような貴重な機会を与えてくださったことに感謝しています。ありがとうございました。

研究科長賞

教育社会学講座
修士課程2年
椎名 健人

研究科長賞という名誉ある賞をいただけましたことを、大変光栄に思います。

私は2009年の教育学部入学時から現在まで吉田寮で生活しており、同時に京都大学新聞の記者として様々な学内問題を取材してきました。それらの経験をもとに、昨年11月に行われた出版コンペティション「第11回出版甲子園」決勝大会で自らの寮生活や吉田寮の歴史を紹介する書籍の出版企画をプレゼンし、4位に入賞。株式会社KADOKAWAをはじめ計6社の編集者様より出版オファーをいただきました。

これは京大入学後、初めて知ったことですが、2012年に他界した祖父も旧制第三高等学校時代に吉田寮に在籍していました。ストームや寮食堂での芝居など、現在の吉田寮における恒例行事のいくつかは祖父の時代には既に存在していたと聞かされ、長きに渡って吉田寮の自治と歴史ある木造建築の寮舎を守り続けてきた先人たちに改めて尊敬の念を強くしました。

祖父が他界した翌年の2013年には卒業生の高齢化を理由に三高同窓会が解散するなど、戦前の学生文化をめぐる状況が一つの転換点を迎えようとしている中、現在まで100年以上続く吉田寮の歴史や自治の素晴らしさを外部に向けて発信することには決して小さくない意義があると考えています。今回の受賞を励みとして、出版化の実現に向けてさらに努力を続けていきたいと思います。この度は誠にありがとうございました。

国際交流

ソウル大学校師範大学教育学科

報告者／比較教育政策学講座 准教授　南部 広孝

教育学研究科は、2011年に韓国のソウル大学校師範大学教育学科と学術交流協定を締結し、この協定のもとでこれまで様々な学術交流を進めてきました。例えば、本年（2016年）2月には本研究科でソウル大学校から20名近い教員を迎えて研究交流会を開催しましたし、10月には渡邊洋子准教授と石井英真准教授がソウル大学校で開催された国際会議に参加しました。こうした交流実績をふまえて、締結から5年を経た今年度、学術交流協定の更新を行うことになりました。

交流協定締結式は、11月11日13時半より、百周年時計台記念館2階迎賓室において執り行われました。ソウル大学校師範大学教育学科からはLim, Cheolil学科長、Baek, Sun-Geun教授、Yoo, Sung-Sang副教授に出席いただき、本研究科からは高見茂研究科長、田中耕治教授、南部広孝准教授、渡辺雅幸助教が出席しました。また、本研究科所属時にソウル大学校との交流活動を中心的に担われました趙卿我講師（愛知教育大学）にも通訳として同席いただきました。式は厳粛ながらもなごやかな雰囲気の中で行われ、高見研究科長とLim学科長の双方から、5年前の協定締結時の経緯を振り返りつつ、今後はいっそう積極的な交流を進めたいとの希望が示されました。そのうえで、学術交流協定書への署名が行われ、改めて5年間の交流協定が結ばれました。なお、締結式に先立って行われた懇談会では、今後の交流のあり方について議論が交わされるとともに、日韓両国における教育の現状や改革動向に関しても情報交換がなされました。

締結式終了後、14時半より16時まで、新たな学術交流協定にもとづく最初の活動として、記念講演会が第一会議室で開催されました。「韓国における現在の教育政策」と題するこの講演会では、Baek教授より、最近の韓国における教育政策の全体的な方向性やその前提となる理念、初等中等教育段階及び高等教育段階での具体的な改革内容などをお話しいただきました。なお、この講演会の様子は京都大学のOCWにて公開される予定です。

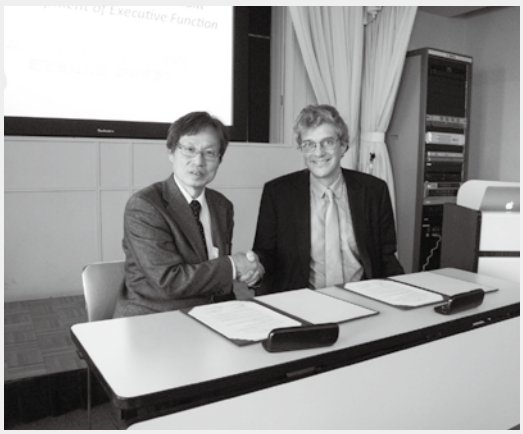
ランカスター大学心理学部

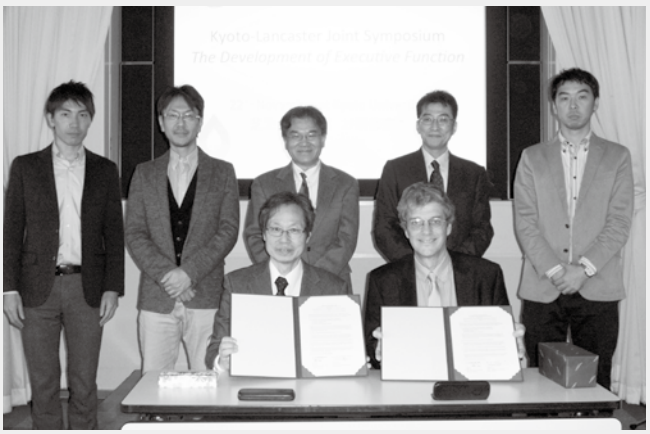
報告者／教育認知心理学講座 教授　齊藤　智

教育学研究科とランカスター大学心理学部は、2006年に学術交流協定を締結し、5年後の2011年に更新しました。協定締結から10年の間、私たちは、様々な活動によって学術交流を深め、その共同研究からは、すでに数編の論文が国際学術誌に報告されています。こうした成果をふまえて、さらに5年間の継続した学術交流を推進するため、2016年11月22日に同協定を再度更新いたしました。ランカスター大学心理学部からは、前学部長であるCharles Lewis先生が京都大学を訪問され、高見茂教育学研究科長とともに学術交流協定の調印式に出席されました。

調印式に続き、2大学による合同シンポジウム「The Development of Executive Function」が開催され、ここでLewis先生にご講演いただくとともに、京都大学からは森口佑介先生（教育方法学講座）と高橋雄介先生（白眉センター・教育認知心理学講座）にご発表いただきました。それぞれのご講演が最先端の内容で、大変刺激的なものであったことに加え、相互に関連するトピックスであったため、議論も深まり、今後の共同研究の萌芽がみられたと感じています。

これまで多くの共同事業をランカスター大学の方々と開催してきましたが、今回、特に強く想起されたイベントがあります。2007年12月に京都で開催した「Executive Function in the Mind」という国際シンポジウムです。このシンポジウムでは、世界最高水準の研究者による講演を軸としつつ、大学院生の主体的な国際活動を促すため、サテライトイベントとして国際セミナーを開催しました。ここでは、京都大学とランカスター大学の大学院生と若手研究者が発表を行いましたが、大学院生が、テーマ設定、企画運営、司会のすべてをまかされていました。その代表者が、今回のシンポジウムで発表してくださった、当時大学院生の森口先生でした。2007年のシンポジウムにコメンテータとしてご参加いただいたLewis先生とともに、その当時のことを思い出し、ランカスター大学との共同イベントが確実に実を結びつつあることを実感したしだいです。今後、第2、第3の森口先生が登場することを願いつつ、ランカスター大学との学術交流を推進していきたいと考えております。





事務室から

教育実習の参加にあたって

教職教務掛長　荒木　茂

教職教務掛は教職課程の教育についても担っており、学生の教員免許取得を積極的に支援しています。教員免許は実務に直結しており、本学では、毎年、教職に就くことを目指す数百名の学生が履修しています。教職課程で学ぶ学生には、教員免許の取得のために卒業要件とは別に教育実習科目の履修も求められており、各々の出身高等学校等で教育実習に臨んでいます。なお、この教育実習は、教員になるという強い決意を前提に教壇に立って授業を行うという経験を得るだけでなく、教育活動全体の認識と理解を深めて、教員として必要な技能・態度等を身につけることを目的としています。また、教職課程の集大成となる科目であり、大学での事前事後指導と実習校や教育委員会等の深い理解と好意により受け入れていただいているので、単に学生として学ぶのではなく、教員に準ずる立場で教員としての視点に立って真摯な態度で臨むことが求められています。

近年、学校教育現場は多忙を極めており、このような中で教育実習生を引き受けることが、教員にとって更なる負担増となるところを、多くの先輩教員の「後輩を育てる」という使命感の上に、教育実習が行われていることを決して忘れないでください。また、「社会人として教育実習に臨む」という意識がなく、「学生気分」のまま実習に臨むことは、学校教育現場にとって、大変迷惑なことで、好意で実習を引き受けていただいている先輩教員に対し、極めて失礼なこととなります。毎年、十分な授業準備を行わずに実習に臨んだ結果、満足のいく成果を得ることができなかった事例が見受けられますが、実習校は負担を承知の上、好意で実習を受け入れていますので、好意を無下にするようなことは絶対にしないようにしてください。実習生が教育実習に対し、誠実に努力をする姿が、受け入れていただいた実習校への一番の恩返しとなりますので、最後まで全力で実習に臨み、教職に就いてください。

図書室から

図書室の開室時間をめぐって

図書掛長　飯田 智子

「開館時間が適切で利用しやすい」「開館日が適切で利用しやすい」。平成27年度に京都大学の全学生・全教職員を対象に行われた図書館機構アンケートの中の評価項目です。教育学部図書室ではこの2つが座席数や資料の充実度を抑え、最も満足度が“低い”という結果になりました。毎日5限終了後に利用できるよう開けておいて欲しい、なぜ夜間は火曜日と金曜日だけなのか、できれば土日の開室も望む、といったご意見もいただきました。

開室時間は図書室の体制やサービスの変化にあわせて、これまでに何度か変更が行われています。その昔は土曜日の午前中も開室していましたが、平成4年度の国家公務員の完全週休二日制の導入を機に中止、代償措置として休業期間を除き12～13時の昼休み休室を撤廃することになりました。教職員が何度も検討を重ねましたが、機械貸出システムが導入されていなかった当時の教育学部図書室では、土曜日開室を継続することは困難だったのです。

現行の火曜日と金曜日の週2回、19時までの夜間開室は、平成18年度の図書室アンケートに時間延長に対する強い要望が寄せられたことをきっかけとして、慎重に検討と試行を重ねて実現したものです。予算が削減される中で、試行運用中の利用実績と開室にかかるコストのバランスをとって決定しました。またそれまで休室していた8月午後の時間帯も開室することになりました。すべての利用者の方々の希望に沿う形ではありませんが、少しずつ改善を重ねてきた状況をご理解ください。

なお、昨年度アンケートの結果を受けて、図書館機構では図書館室の開館日・開館時間を拡大する事業を実施することになりました。教育学部図書室も今年度の12月後半と1月後半の一定期間に試行します。開室時間は機構サイトや掲示のカレンダーでご確認ください。今後のサービスを考えていく材料とするためにも、ご利用いただいた感想やご意見をお寄せいただけると嬉しく思います。

オープンキャンパス2016

平成28年8月9日（火）～10日（水）の3日間、「京都大学オープンキャンパス2016」が開催された。

本学部においては、8月10日（水）12時30分から実施し、454名の参加者があった。

当日は、高見茂学部長からの歓迎のあいさつ後、服部憲児准教授による模擬授業、各系の説明と質疑応答、併せて、岩井八郎教授により特色入試の説明が行われた。また、13時から16時まで、学生相談員が個別に相談にあたり、高校生の相談に親身に応じていた。

参加者は熱心に耳を傾けており、満足気な様子がうかがわれた。

大学院・学部学士入学 入試説明会

平成28年6月25日（土）京都大学東京オフィスにおいて、平成28年7月9日（土）京都大学吉田キャンパスにおいて、大学院及び学部学士入学の入試説明会が開催された。

東京オフィスでは、14時から高見茂研究科長からの歓迎のあいさつ後、齋藤直子准教授によるオープニングレクチャー「<美しい知識>とアメリカ実践哲学：双方向的国際化を志向する教育」、入試ガイダンス、個別相談が実施された。

吉田キャンパスでは、14時から高見茂研究科長からの歓迎のあいさつ後、入試ガイダンスが行われ、大学院学生による個別相談が実施された。

いずれの会場でも、受験希望者が熱意を持って参加していた。

諸記録

おもな出来事（2016.4.1-10.31）

4月	22日（金）	**高大連携：特別授業「実習を通して学ぶ臨床心理学」**（対象：滋賀県立膳所高等学校） （総合研究1号館）
5月	11日（水）	**ブルゴーニュ大学Boucheix教授講演会** **「Learning from dynamic visualizations,are they as good as we think?」** （教育学部本館）
	27日（金）	**高大連携：SGH課題研究セミナー** （対象：福岡県立京都高等学校1年生）
6月	9日（木）	**第１５回デザイン心理学講演会「感情が認知的処理を促進・抑制するメカニズム」** （教育学部本館）
	11日（土）	**講演会** **「American Philosophy in Cross-Cultural Dialogue — Conversations with Richard J. Bernstein」** （国際科学イノベーション棟シンポジウムホール）
	24日（金）	**高大連携ワークショップ２０１６** **「町おこしワッショイ２～北高生と京大生でふるさとのこれからをplanning」** （対象：京都府立北桑田高等学校普通科２年生）（京都府立ゼミナールハウス）
7月	22日（金）	**Henning先生とDryer先生によるワークショップと講演会** （教育学部本館）
	31日（日）	**こころの支援室** **「京大博物館ツアー　虫博士になろう！＆和・話・輪の会」** （総合博物館・総合研究１号館）
8月	8日（月）	**Cecilia Cheung先生講演会** （教育学部本館）
	18日（木）	**なつかしさ心理学セミナー「なつかしさが心理・社会・身体的幸福感に及ぼす影響」** （教育学部本館）
	19日（金）、20日（土）	**E.FORUM全国スクールリーダー育成研修** （総合研究３号館）
	20日（土）	**２０１６野童いなか塾（第12回）童仙房ミュージアム** （旧野殿童仙房小学校（野殿・童仙房生涯学習センター）・周辺散策路）
	21日（日）	**附属臨床教育実践研究センター** **第20回リカレント教育講座「「心の教育」を考える-発達障害の理解と対応-」** （百周年時計台記念館）
10月	2日（日）	**附属臨床教育実践研究センター** **公開講座「「母子関係と創造性」-ウィニコット理論から「受胎告知」を理解する-」** （京都テルサ東館）
	14日（金）	**Rubin教授 Event Memory講演会** （教育学部本館）
	31日（月）	**Stefania Dimitrova博士講演会** **「21世紀スキルをはぐくむ：異なるアプローチと1つのゴール」** （教育学部本館）

人事異動（H28.6.2-H28.10.31 ）

平成28年7月22日付け

SHEN, Heyong	招へい外国人学者	受入

平成28年7月31日付け

	技術補佐員（教育方法学）	退職
	事務補佐員（教育方法学）	退職

平成28年8月1日付け

ABRAM, Jan Kathleen	客員教授（附属臨床教育実践研究センター）	採用

平成28年8月31日付け

	技術補佐員（教育方法学）	退職
	派遣職員（総務掛）	任期満了

平成28年9月1日付け

YU, Lira	外国人共同研究者	受入
	事務補佐員（比較教育政策学）	採用
	事務補佐員（比較教育政策学）	採用
	派遣職員（総務掛）	採用

平成28年9月30日付け

高橋　雄介	特定准教授（教育認知心理学　デザイン学）	退職

平成28年10月1日付け

駒込　武	教授　現代教育基礎学系長（任期28.10.1-29.3.31）	
田中　智子	准教授（教育学）	採用
高橋　雄介	特定准教授（白眉センター）	受入
	事務補佐員（地域連携教育研究推進ユニット）	採用
内海　健太	研究員（教育認知心理学）	採用

平成28年10月16日付け

市川　千秋	研究員（地域連携教育研究推進ユニット）	採用

外部資金受入れ（H28年度）

◎共同研究

研究題目	委託者	担当者
技能の継承方法に関する共同研究	日本電信電話株式会社	教授　楠見　孝
料理画像とレシピテキストとの対応付けに関する研究	クックパッド株式会社	助教　橋本　敦史
筆圧とストレスに関する研究	株式会社ワコム	准教授　野村　理朗

◎受託研究

研究題目	委託者	担当者
「活力ある生涯のためのＬａｓｔ５Ｘイノベーション」拠点 子どもの脳と社会性発達を支援する紙おむつの開発	国立研究開発法人 科学技術振興機構	教授　明和　政子

◎寄付金

研究題目	寄附者	担当者
「もう一つの知」に関する歴史人類学国際会議－現代における 身体知・暗黙知・知恵の可能性	公益財団法人 京都大学教育研究振興財団	教授　鈴木　晶子
母親の身体感覚の個人差が乳児の感情理解に与える影響	公益財団法人前川財団	教授　明和　政子
身体接触を伴う母子間相互作用が乳児の感情表出に与える影響	公益財団法人前川財団	助教　田中　友香理
幼児の主体的な意思決定がトイレトレーニングに与える影響	公益財団法人前川財団	特定助教　日吉　和子

教育学研究科・教育学部基金（詳細はP14）

ご寄付いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。
（公開をご希望されない方については、掲載しておりません。）

今津 孝次郎 様	奥田 昌秀 様	茶本 卓子 様	美那川 雄一 様	盛永 俊弘 様
浦田 広朗 様	小野市立河合中学校 様	花岡 由美子 様	三藤 あさみ 様	森本 洋介 様
大垣北高校 様	砂田 麻理 様	廣瀬 直哉 様	宮﨑 亮太 様	
大倉 寿之 様	髙木 枝美子 様	ベイヤー 浩子 様	村山 正治 様	
岡田 渥美 様	柞磨 昭孝 様	眞継 芳春 様	森田 達己 様	

（五十音順）　　平成28年10月末日現在

新任教員・事務職員紹介

田中 智子
准教授

はじめまして。幕末維新期以来の高等教育機関の設立過程について研究しています。大学入学以来のフレッシュな気持ちでがんばります。小さめですが意外と丈夫です。

所　属　教育学講座
専　門　近代日本教育史

派遣職員

9月から総務掛でお世話になっております。皆様のお役に立てるようがんばります。よろしくお願いします。

所属掛　総務掛

教育学研究科・教育学部基金

ー未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みますー

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場など人が育っていくあらゆる場面を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果を現場（フィールド）に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

④基金の使途：

項　目	具体例
（1）教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣　など
（2）研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催　など
（3）その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動　など

詳細は以下のとおり
http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html

編集後記

数年前から教育・研究活動の一環で、とある離島の小学校を訪問しています。児童数2名の小さな小学校です。でも独立した小学校です。校長先生もいます。校務としてやるべきことも他の小学校と変わりません。小さいが故の難しさもありますが、そこでは人と人とが向き合った教育が行われています。本学部・研究科もとても小さな部局です。でもお互いの顔が見えます。それはとても大きな財産だと、編集しながら思いました。

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長　岡野　憲一郎 教授（臨床教育実践研究センター）
委　員　高見　茂 教授（教育学研究科長・教育学部長）
委　員　山名　淳 准教授（教育学講座）
委　員　服部　憲児 准教授（比較教育政策学講座）
委　員　眞継　芳春 事務長
委　員　古屋　比奈 総務掛長
委　員　辻　幸代 教務掛長

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075(753)3000
ホームページ http://www.educ.kyoto-u.ac.jp